シンポジウム報告：

誤解の構造

―トマス・カーチマンの理論によせて―

石川　准

1 誤解の構造

ここに対照的な二つの文化がある。異文化理解訓練の有名なシミュレーション・ゲームであるBAFABAFAをまねて、それぞれを「アルファ文化」、「ベータ文化」と呼ぶことにしよう。

アルファ文化は感情を小さく表現する文化である。アルファの人々は、感情表出、とくに公的な場におけるそれは理性を霍乱し場を混乱させる危険なものだから、極力自制しなければならないと考える。悲しみや憎しみや怒りといった否定的な感情はもちろん、喜びや幸福感や愛情のようなそれ自体としては肯定的な感情でさえ、抑制せずにストレートに表出してしまうと不適切とされるのがアルファ文化である。

もちろんアルファの人々も感情というものをただ否定するわけではない。抑制しても抑制してもしきれずににじみでてしまった感情こそが真の気持ちだと信じ、そうした感情には高い評価を与えるのがアルファ文化である。

アルファ文化には感情を抑制的、限定的に表現するための様式が発達している。時間や場所や相手を選ぶのもそうだし、目とか口とか手といった身体の一部だけで小さく表現するのもそうだ。あるいは分かる人にしか分からないように表現を暗号化するという様式もある。とにかくアルファ文化は、こうした様々な様式を組み合わせて感情表現を抑制し、限定する

一方、ベータ文化は感情を大きく表現する文化である。ベータ文化では感情は価値の高いものであり、自制せずに、ありのままを素直に表現しなければならない。感情は、人をいやし活気づけ充実させるものだから、抑圧してはなら

ず、したがって、気取って表現された感情や技巧的に表現された感情は、装われた偽りの感情であり、不自然で不適切なものと考えられる。

ベータ文化でも、感情が様式にそって解放されなければならないとされる点はアルファ文化と同じである。しかし様式の内容はアルファ文化とは対照的だ。ベータ文化が求める様式は、身体全体で表された屈託ない喜びであり、深い悲しみであり、断固たる怒りである。

さて、いまアルファ文化の人aとベータ文化の人bが初めて出会ったとしよう。はたしてアルファ人のaとベータ人のbはスムーズにコミュニケートできるのだろうか。それともなんらかの誤解にはまってしまうのだろうか。aはbの感情表現をどのように見積り、bはaの感情表現をどのように評価するだろうか。

一方の行為者の行為や表現の意味が相手に曲って伝わるシステムのことをここでは「誤解」と呼ぶ。この誤解というシステムは、各行為者が身に付けている発言や行動を解釈し評価する枠組の不一致により実現する。

アルファ文化に属する人とベータ文化に属する人が出会うときにもこの誤解は起きる。しかし注意すべきは、アルファ人にとってベータ人の感情表現があまりに大きすぎ、ベータ人にとってアルファ人の感情表現があまりに小さすぎるために誤解は起きるのではないということだ。誤解のほんとうの原因は様式の違いに対する当事者の無知にあり、誤解は表現の見かけ上の違いや一致とは独立に生じる。つまり、アルファ文化に属する人はベータ文化の様式を知らず、ベータ文化に属する人はアルファ文化の様式を知らないことから誤解は起きるということだ。

さて、いまaとbが何等かの共通の理由によって同時に悲しみを経験したとしよう。そしてそれをそれぞれなりの様式で表現しているとしよう。すると二人の表現様式が異なることから、aにとってbの悲しみの表現はあまりに強烈で、「こんなに悲しむ人には会ったことがない」となるはずだし、bにとってaの悲しみの表現はあまりに微妙で「こんなに悲しまないでいられる人には会ったことがない」となるはずだ。誤解はこのときすでに始まっている。aはbの悲しみを過大評価しbはaの悲しみを過小評価しているからだ。

様式の違いを知らないことが、誤解のシステムの成立要件なら、誤解が始ま

っていることに当事者が無自覚なのもまた誤解のシステムの本質的特徴である。aはあくまでアルファの基準に準拠してbの表現を大きすぎると評定し、bはもっぱらベータ文化の基準に照らしてaの表現を小さすぎると判断するわけだが、二つの文化の違いが自覚されずに隠蔽されるかぎり、つまり評価の枠組自体にずれがあることが気づかれない以上、評価した結果が誤解であることもまた自覚されようがないということになる。

どうしてaとbが評価の枠組のずれに気づけないかというと、アルファ文化にとってのbの表現も、ベータ文化にとってのaの表現も、平均的な表現からはひどく外れてはいるものの、絶対にありえないわけではないこと、つまりありうる範囲内の出来事だからである。アルファ文化にとってbの悲しみの表現はあまりに強烈だが、ごく稀にはそういう人もいることを認めており、ベータ文化もaの冷静さをめったにない非常に珍しいこととして認めている。枠組は一過性の逸脱的表現によってはくつがえされないということだ。

似た議論が科学史、科学哲学の世界にある。パラダイム論である。いったん権威あるパラダイムとして確立した科学理論がいかに強靭で、反証データだけでは倒れないかを主張するのがパラダイム論である。パラダイム論が想定する科学理論は必然法則として定式化された自然科学の理論体系である。必然法則だから、論理的には理論は一つの反証データによってさえ一挙に倒されうる危ういもののはずだが、パラダイムの権威の前には、観察や実験の手続きの信憑性が執拗に疑われ、理論に抵触するデータは理論には指一本触れられず無視されるのが普通だという。

社会科学の理論はどうかというと、社会科学のなかには理論法則というものを認めない立場もあるが、多くは確立論を導入して蓋然法則を主張する。社会学でも同じである。確率論的理論形式の本質は、あらゆる現象は分散して分布しているという過程である。そして正規分布とかT分布とか二項分布などといった確立関数を適用して、仮設を検定し命題を主張するのが確率論である。

もう少し敷衍しよう。正規分布は、ある任意の事象の取る値が、平均値から標準偏差の1倍の範囲内におさまる確立は約68.3%、標準偏差の2倍の範囲に落ちる確立は約95.4%、標準偏差の3倍の範囲内である確立は約99.7%という性質を持つ確立関数である。現実の事象の分布がこの正規分布に近似して

いると仮定できるのなら、そして平均値が知られているのなら、いまここで観察された事象がどれぐらい珍しい出来事なのか、あるいはどれほど陳腐な出来事なのかを判断することができる。たとえば標準偏差の1倍から2倍の範囲の出来事が起きる確率は、標準偏差の1倍以内の出来事が起きる確率に比べると約39.7%でしかなく、標準偏差の2倍から3倍の範囲の出来事が起きる確率は、1倍以内の出来事が起きる確率のわずか約6.3%にすぎないということになる。事象が起きる起きやすさは平均からの偏差が大きくなるにつれ減少する。平均的な事象は起きやすく平均から遠く隔たった事象はめったに起きないということだ。

社会科学が自然科学と異なるのは、確立論に依拠する社会科学ではデータによる理論の反証はますます困難だということである。理論は逸脱の存在を許すようにあらかじめ定式化されているため、よほど珍しい逸脱的なデータでさえ、理論はそうした出来事が起きうることを認めているから、データは理論を棄却できないことになる。理論と抵触しないことにはデータは理論を否定できないわけだ。

理論に抵触するデータが存在しないということになると、理論は反証可能ではないということになる。しかし、かつてカール・ポパーが強調したように、反証可能性は実証主義に依拠する科学理論にとっては絶対に満たさなければならない条件だから、データによって理論が棄却されないのでは困る。そこで確立論が用意したのが検定という反証装置だった。検定とは要するに、非常に珍しいことは起きないことにしようという申し合せである。理論に照らして、観察された事象が非常に珍しい場合は、非常に珍しい事象が起きたのではなく、理論のほうが誤っていたのだと考えることにしようという約束だ。普通は当該の理論を認めると、5%以下とか1%以下の確立でしか起きないはずの事象が生起したことになるときは、そのようなデータを例外的とみなすのではなく、理論を棄却するのである。起きにくいことは起きないとすることで、確立論と反証可能性を両立させようとする工夫である。

簡単にいえばこういうことだ。いまコイン投げを行なったところ、8回続けて表が出たとしよう。私たちはこの出来事をどのように理解するだろうか。「ふつうは非常に珍しいことが起きた」と感じるはずだ。ちなみに歪みのない

コインを投げて一方だけが8回連続して現れる確立は1/256である。

それではさらにコイン投げを続け、16回連続して表が出たらどうだろう。ほんとうに歪みのないコインだとすれば、こんなことが起きるのは1/65536というほとんどありえないような確立だが、それでもなお人は「奇跡のようなことが起きた」と思うだろうか。あるいはさすがにこうなると、歪みのないコインという前提＝思い込みのほうを疑い、コインを調べ出すだろうか。

何回連続して表が出たところでコイン投げを中断しコインを鑑定しはじめるかは人により異なるが、社会科学では、5％以下とか1％以下の確立でしか起きないはずの事象はいまは起きていないのだということにして、事象の出現確率をそのように小さく見積もった理論のほうを棄却するのである。

これが日常的な知識や考えとなるとデータそのものの反証力はさらに危うい。深く信じ込んでいる考えは、その考えと矛盾する出来事に対してさえ頑健だし、逆に半信半疑の考えはわずかの期待はズレにももろくも崩れる。検定という手続きが明示的に決っていないため、日常的な知識の耐久性は、もっぱら知識自体が調達している正当性しだいということになるわけだ。

したがって、もしアルファ文化に属するaとベータ文化に属するbが自文化の枠組をユニバーサルなものとみなす文化的普遍主義を身に着けているとしたら、両者は共に相手の感情表現を誤解するはずだ。aにしてみればbは「そこまで悲しがらなくてもいいのに」となるし、bからはaは「どうして悲しまないでいられるのか分からない」となる。aにとってbは、そしてbにとってaは、逸脱した変わり者だということになる。

だがもしaとbが自文化の枠組をローカルなものとみなす文化的相対主義を内面化していたらどうだろう。いったんは自文化の基準に照らして相手の表現を逸脱的、例外的とみなすだろうが、両者はまもなくそうした自分の解釈に疑いを持ち、相手の表現を平均的な表現として再解釈できるような枠組への枠組変更を試みるはずだ。逸脱的とみえた相手の表現は、枠組変更によって日常化され平均的なものとみえるようになる。

私は以上のような視点、つまりそれぞれの文化において確立したコミュニケーション・スタイルが異なるために、そして当事者はそれを普遍的なものと考えるために、誤解は誤解を呼び行き違いの悪循環システムができあがってしま

うという考え方に立って、異文化間の誤解にアプローチする。トマス・カーチマン (Thomas Kochman) による米国における黒人と白人の誤解の分析もそうして始まったし、デボラ・タネン (Deborah Tannen) の女性と男性の誤解の分析もやはり同じ視点で進められた。

以下では、まず第二節で私がもっとも影響を受けているトマス・カーチマンの理論を紹介する。続く第三節ではセクシュアルハラスメントという主題へのその応用を試みる。最後にこうした考察を通して得た一つの仮説を示す。

2 黒人文化と白人文化のコミュニケーション・スタイル

a. 論争と議論

カーチマンによれば、アメリカの黒人文化（アフロアメリカン文化）と白人文化（アングロアメリカン文化）とでは、そもそも話合いの様式からして異なるという。一方が適切とみなす様式を他方は不適切とみなす。そのため話合いは内容に入る前に話合いの様式をめぐる誤解によって足をすくわれ破綻するとカーチマンは主張する。

黒人文化の話合いの様式は「論争」である。黒人は自分の問題に対する立場を明らかにし、主張の擁護者となって論争することを適切と考え、問題から距離をとって主張の分析者、報告者（スポークスマン）にまわって議論することは不適切と感じる。黒人文化は主題に対して立場をとることを要求し、中立的な態度、あいまいな態度を軽蔑する。コミットメントと意欲と情熱を込めて主張することが求められ、冷静な態度、分析的な様式は問題へのコミットメントの欠如と解釈される。白人文化では権威を呼ぶ引用は成立するのみならず有効だが、黒人文化では自分だけの実力で説得力のある主張を展開することが期待される。

一方、白人文化の話合いの様式は「議論」である。白人文化は、主題に対して冷静な分析的態度で臨むことを要求する。白人文化では、自分の主張を信じ

すぎてはいけないという科学の要請が日常的な話合い場面でも通用する。自分の考えに愛着を持ちすぎると、説得力のある反論に対してさえ耳を傾けることができず、信念と信念の争いに陥ってしまい、より正しい結論を得るという話合いの目的が破綻するというのがその論拠だ。こうした考え方の裏返しとして、白人文化の話合いの枠組では、発言者は、かならずしも自分の意見にコミットしなくてもよいし、行動と直結していなくてもかまわないとされる。たとえ信じていない考えであっても、考え自体が有効ならば、その意見は採用されるし、そうした意見を述べた発言者は討論に貢献したことになる。

白人文化と黒人文化のコミュニケーション・スタイルは、計画性と即興性という観点から比較することもできる。それは順番取りの方法に典型的にみられる。白人文化では順番取りは、発言権を順番に移譲していくシステムであるが、黒人文化には、全員に発言するチャンスを平等に与えなければならないとするルールはないため、順番取りは競争となる。白人文化では、発言する意志を議長または集団の成員全体に伝え、許可を得てはじめて発言権が得られるが、黒人文化は、発言する価値のある意見を持つと主観的に確信する者の発言を認めるルールを採用している。

b. 感情と感受性

白人文化は、理性と感情はトレードオフの関係にあると仮定する。人は感情の抑制ができなくなると、感情に圧倒され、冷静な判断や理性的な行動が採れなくなる。だから感情は、抑制不能になる前にできるだけ早い段階で自己抑制しなければならないというのが白人文化の考え方である。

一方黒人文化は、感情は理性を霍乱しないのみならず、かえって理性を目覚めさせ、活性化させると考える。黒人は、感情の高ぶりをパフォーマンスの燃料にする技術を訓練している。自分の感情に動揺せずに、ほとばしる感情を集中力とコミットメントに変換し、パフォーマンスに生かそうという考えだ。

実際黒人文化には、挑発や侮辱への耐久力を訓練する様々な装置が用意されている。サウンディング、シグニファイ、ダズンゲームなどと呼ばれる挑発ゲ

ームはなかでもよく知られている。こうした挑発ゲームでは、挑発に傷ついたりたじろいだりカッとしたりしたほうが負けとなり、喧嘩を買わずに売り続けられたほうが勝ちとなる。黒人たちは子供のころから繰り返しこうした遊びを行なって、挑発や侮辱にたじろがない精神的スタミナと挑発へのとっさの応酬力を鍛えている。

白人の自己提示は穏やかで感情抑制的である。一方、黒人の自己提示は感情がほとばしり、ダイナミックであり、表現力に富んでいる。白人が配慮しようとする気持ちは、抑制の効いた受動的で細やかな感受性だが、黒人が優先しようとする気持ちは、能動的で自発的な感情である。黒人の感情表現においてしばしば激しい感情がほとばしるのは、表現の強さに対する規範的制約がないからである。唯一の要請は表現は感情の深さに対応していなければならないということである。抑制された表現や技巧的な表現や沈黙は、魂への呼びかけを裏切るものであり、不適切と考えられている。

c. 自我自賛と謙遜

「自我自賛」への評価は、黒人文化と白人文化とではまったく異なる。白人文化は謙遜を肯定し自画自賛を否定するが、黒人文化は自画自賛に寛大である。自画自賛には、冗談として提示される「ほら吹き」(boast) と、事実だとして提示される「自慢」(brag) が含まれる。

ほら吹きは、白人文化では歓迎されない冗談である。というのも、たとえ冗談でも、一般にほら吹きには多少なりとも自慢の要素が含まれているからだ。したがって、ほら吹きが白人文化で許容されるとしたら、吹かれた内容が誰の目から見ても事実に反することが明らかな場合、つまり自画自賛の要素がまったくないことが保証されているときだけである。

一方黒人文化ではほら吹きは楽しいユーモアとして受け入れられる。仮にそれが冗談を装ってなされた自慢でも、自慢に対して黒人文化は相対的に許容的であるため、内容に誇張がある場合は、ほら吹きを偽装した自慢であっても許容される。

白人文化では自慢することは逸脱であり、自慢は間接的な方法で何気なく行なわなければならないのに対して、黒人文化はストレートな自慢にも許容的だ。正確にいえば、黒人社会は、所有を誇る者には冷やかだが、能力を誇り、行動でそれを実証して見せる者をヒーローとしてもてはやす文化を発達させている。

3 黒人文化とセクシュアルハラスメント

「連邦判事と大学教授。いったい、どちらを信じたらいいのか。熱気に包まれた連邦議会の一室で、一人の傷ついた男と一人の傷つけられた女が一つの正義を争っていた。最高裁判事候補クラレンス・トーマスとオクラホマ大学教授アニタ・ヒル。一見、非の打ちどころのない二人の人生が、突然醜いスキャンダルで正面からぶつかり合った。」[ニューズウイーク, 1991:38]

二年前に起きた黒人連邦判事のセクハラ疑惑である。だが、私はこの事件について何かを言おうというのではない。それはアメリカ政治の消息通に任せ、私は黒人文化におけるセクシュアリティ（性的欲望）の話をしよう。

黒人文化においてはセクシュアルハラスメントは成立しない。こういえば暴論に聞こえるだろうか。もう少し厳密にいえば、セクシュアルハラスメントつまり性的いやがらせは、男女の間に性的であることへの非対称性（アシンメトリ）が成立する文化でしか定義できないというのが私の主張だ。

「ズボンの前を開けたままトイレから出てきた男は、女たちに見られ笑われてしまった。そこで男は一人の女に近づいて、『やーベイビー、ピッカピカのタイヤを4本はいた大型の黒のキャデラックが、他でもねえカワイコちゃんのあんたを乗せてドライブしようってわけで、準備万端済ませちまってお待ち兼ねなのが見えるかい』とラップした。それへの女の応酬は『アーラおあいにく。くたびれたペタンコのタイヤを2本付けたちっぽけな灰色のワーゲンなら見えるけどさ』だった。」[Kochman, 1981:77]

男のラップへの黒人女性の反応はおおらかでたくましい。黒人文化は、積極性や自己主張を評価し、女性にも等しく性的表現を口にする自由を与える。女

は従順であっても、依存的であっても、消極的であってもいけない。

黒人の男は、盛り場といわずビーチといわず、街角といわず公園といわず、暇さえあればいたる所で女に近付きラップを仕掛ける。直接話しかけられないなら、男はいわゆるポン引きの目付き（ピンプアイ）のような非言語的表現でもってサイレントラップを仕掛けるほどの徹底ぶりだ。

ラップの内容や形式はいろいろある。イカすラップもあればダサいラップもある。ラップされて嬉しくなるラップもあれば、いやがらせでしかない不愉快なラップもある。だが相手に対する自分の性的欲望を明け透けに述べることや、相手の女性の性的魅力を露骨に讃えたり自分の性的能力を誇示したりすることは、どんなラップにも含まれる基本成分だ。

ラップの目的はただ一つ、男は女とセックスしたくてラップを仕掛ける。もっとも男は、その気になればいつでも女をくどき落せるところを見せようとしてラップすることもある。ある男の言葉を借りるなら「自分のイメージを貯金するため」にもラップするわけだ。

もちろん女には選択の自由が与えられている。男がラップして迫ってきたからといって、女はなにも男につき合う必要はない。女の拒絶の仕方には、無言であしらうものから、もっと強くラップでやり込めるものまで幅があるが、共通するのは女はラップにたじろいだり、ラップにじっと耐えたりする必要も理由もないということだ。女には、ラップにはラップで対抗する自由が認められているし、自分のほうから先手を打ってラップすることだって許容されている。性的であることへの対称性（シンメトリ）が実現しているわけだ。

一方白人文化の男の女性へのアプローチは、世の中には二種類の女がいるという前提に従う。「まじめな女」と「だらしない女」だ。まじめな女というのは自分の性的欲望を否定する女、隠蔽する女のことであり、だらしない女とは自分が性的存在であることを公然と認める女のことだ。まじめな女は、性的表現を口にし、多くの男とつき合うようになり、独立心や積極性や性的自己主張といった男性的性格を帯びるようになるにつれ、だらしない女となり、女としての社会的信用を失っていく。

白人の男の言い寄り方は、こうした白人男性文化の女性観に基づいている。だらしない女に対しては、男はそうした女を蔑視しているから、自分の欲望の

おもむくままに、相手の返事もろくに聞かずセックスを急ぐ。男たちは、自己の性的欲望を口にする女や、ナンパに応じる女には、男を選り好みする資格も意志もないと感じている。そうした女は男なら誰とでも寝るはずで、拒絶するわけがないと考えるわけだ。

まじめな女に対するアプローチはこれとは一変する。まじめな女は自分の性的欲望を否定し隠そうとするはずだから、無理に彼女たちに性的欲望を認めさせようとする迫り方は性的いやがらせとなり、したがって拒絶されるだけだという予期に基づいて男は行動する。要するに、男は性的な誘いを、どうということのない頼みや申し出にくるんで女に伝えようとするわけだ。「コーヒーでも飲まないかい」とか、「きみのアパートまで送るよ」というような具合にである。

だから、こうした配慮をせずに露骨に性に言及し性的誘惑を行なうことは、女の性的欲望を否定し隠蔽するという共同欺瞞を放棄したことを意味し、相手の女をみくびったことになるから、侮辱となる。そればかりか、それでも相手の女性がまじめな女であり続けようとして、性的挑発に応酬できずに沈黙するだろうことを見越して行なわれた狡猾な性的いやがらせとなる。性をめぐる非対称性の構造を利してなされるセクシュアルハラスメントというわけだ。

黒人文化はこれとはまったく異なる。黒人の男女間では、セックスはオープンで直接的な言語的意志表示と交渉を通じて実現する。男はラップで女への性的欲望を伝え、女は自分にもその気持ちがあるかどうかを言葉で返答する。状況証拠は性的結果を予想する手がかりにはならない。男と二人きりになることに同意したからといって、男が望むようなことになるチャンスが増すわけではないし、街や酒場で知り合った女のほうが、友達の紹介で知り合った女よりセックスできる確率が大きいということにもならないのだ。

黒人文化では、女性は性的欲望を持ち、セックスを口にするからといって、誰とでも寝る女だとみなされることはない。こうしたことでは女は評判を落さない。男たちは大胆にセックスへと誘うが、女たちの拒否する権利を認めている。女は一般的には男とセックスするものだが、いまここでの自分とのセックスに同意するかどうかは分からないということを男は理解している。

しかし黒人も、ミドルクラスともなれば、否応なく白人文化との交流や接触

の機会は増すから、こうした自文化のスタイルはしだいに脱色されていく。「ザ・コスビー・ショー」のビル・コスビー扮する黒人医師を思い出そう。「オレオ」と呼ばれようが「ソウルを売っちまった連中」と揶揄されようが、アッパーミドルやミドルの黒人たちの多くは白人文化のコミュニケーションスタイルに適応していく。こうして性的非対称性が生じてくれば、セクシュアルハラスメントもまた成立しうるようになるのは当然の成り行きだ。あるいはトーマスとヒルもそうだったのかもしれない。

4 おわりに

こうした黒人文化と白人文化の特徴は、マイノリティ文化とマジョリティ文化一般の特徴だと考えられないだろうか。マイノリティ・マジョリティ構造のなかで、マイノリティとマジョリティのコミュニケーション・スタイルはそれぞれの社会的位置に適合するように発達する。

アメリカ社会をマイノリティとして生きるアフロアメリカンたちは、規範性より自発性を、中立性より立場性を、計画性より即興性を、謙遜より自我自賛を、分析的理性よりコミットメントを評価する文化をはぐくむ。それは、置かれた構造への動的適応としてはまことに理にかなったものだ。

たとえば謙遜は、業績に見合う報酬が約束されるマジョリティの美徳なら、自我自賛は、過小評価されることが普通であるマイノリティが状況に適応するために編み出した生活技術だともいえるだろうし、議論を好み論争を回避しようとするのが、規制のシステムを保守することが利益となるマジョリティの行動様式なら、総論より各論を、分析よりコミットメントやアクションを重んじるのは、秩序への異議申し立てを鼓舞することに利益のあるマイノリティ集団が発達させたい行動様式であるだろう。

もちろん、すべてのマイノリティがこうした文化を創造することに成功するわけではない。同化戦略を選んだマイノリティ集団はマジョリティ以上にマジョリティの行動様式を模倣しようとすることはよく知られている。マイノリテ

ィはこうして二極化し、内部に対立や誤解を抱えることにもなる。

ところで、もし、黒人文化と白人文化の対照性がマイノリティ文化とマジョリティ文化の対照性として一般化できるとしたら、カーチマンの議論は、アフロアメリカン文化とアングロアメリカン文化という二つの特殊な文化の組み合せで起きる独特な誤解の構造を示したということでは終わらない。これが私がこの小論を通じて一番指摘したい点だった。とはいえ、もちろんいまのところそれは仮説にすぎないけれども。

＜文献＞

Kochman, Thomas 1981 *Black and White Styles in Conflict*, University of Chicago Press. =1994 石川 准訳『即興の文化－アメリカ黒人の鼓動が聞こえる』新評論.

『ニューズウイーク日本版』1991年10月24日号.

Tannen, Deborah 1990 *You Just Don't Understand: Women and Men in Conversation*, Morrow. =1992 田丸 美寿々・金子 一雄訳『わかりあえない理由－男と女が傷つけあわないための口のきき方10章』講談社.

（いしかわ　じゅん／静岡県立大学）

編集付記

この小特集は、去る1993年4月25日に行われた本学会大会のシンポジウム「在日外国人と国民国家のゆくえ：複合的アイデンティティの可能性」をうけて企画されたものである。登壇者である御三方に、当日の報告を発展させた論考を寄稿していただいた。

当日は御三方の報告の後、非会員を含む30名以上の聴衆を交えて、3時間を越える熱のこもった討議が行われた。御三方の論考からその雰囲気を感じとっていただければ幸いである。

最後に、多彩な参加者の、ともすれば錯綜しがちな議論を的確に整理して下さったシンポジウム司会者の町村敬志会員、そして何よりも、報告と原稿執筆を快く引き受けて下さった御三方に篤く御礼申し上げたい。